

福岡市埋蔵文化財調査報告書第320集

Yoshizuka Honmachi Ruins 2nd.

吉塚本町遺跡2次調査の報告



1993

福岡市教育委員会

目 次

◇ ごあいさつ	3
◇ はじめに	4
◇ 吉塚本町遺跡の立地について	8
◇ 遺構と遺物	12
◇ まとめ	18

凡 例

本書は福岡市教育委員会が1991年度に実施した吉塚本町遺跡第2次調査の報告である。遺構・遺物の実測製図及び写真撮影にあたって古川千賀子（福岡大学大学院生）の協力を得た。本編は調査担当者が編集した。調査によって得られた資料は、福岡市埋蔵文化財センターに本収蔵の予定である。

遺跡略号 Y S H - 2 調査番号 8124

調査地 福岡市博多区吉塚本町地内

分布地図番号 3 : A - 5

開発面積 2605.47m² 調査面積 1900m²

調査期間 1991年9月5日～1991年11月30日

○表紙写真 発掘調査区全景（東より）



ごあいさつ

福岡平野は古来より先人の生活の場であったようで、緊急発掘調査によって明らかになった遺跡も都市を追うにつれて数を増してきました。ここに報告するのは、道路建設に伴う埋蔵文化財の調査です。今回の発掘によって見つかった古塚駅操車場のプラットホームは近代の駅建築の名残りをとどめています。また出土した縄文土器や弥生土器はこの付近にはやくから生活した古代人の姿を連想させます。

さいごになりましたが、調査を実施するにあたって御協力いただいた関係者各位に心より御礼を申し上げます。

1993年1月

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

はじめに

調査の概要

発掘調査に至るまで

1990年6月、土木局街路課から博多区吉塚の事前調査願いが出された。埋蔵文化財課では、吉塚本町遺跡にかかることから、試掘を要すと判断し、6月27日に実施した。その結果、古墳時代を中心とする造構が確認されたため、文化財保護法57条2項に則って発掘調査が必要との意見を示した。その後、翌年度に調査を行なうとの方向で協議が整った。発掘調査は、91年9月5日に着手、資料整理は平成四年度である。

調査の組織と構成

調査委託 福岡市土木局道路部街路課

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾学 同第二係長 塩屋勝利 文化財主事、横山邦雄 事前審査担当 瀧本正志

庶務担当 寺崎幸男

調査担当 常松幹雄

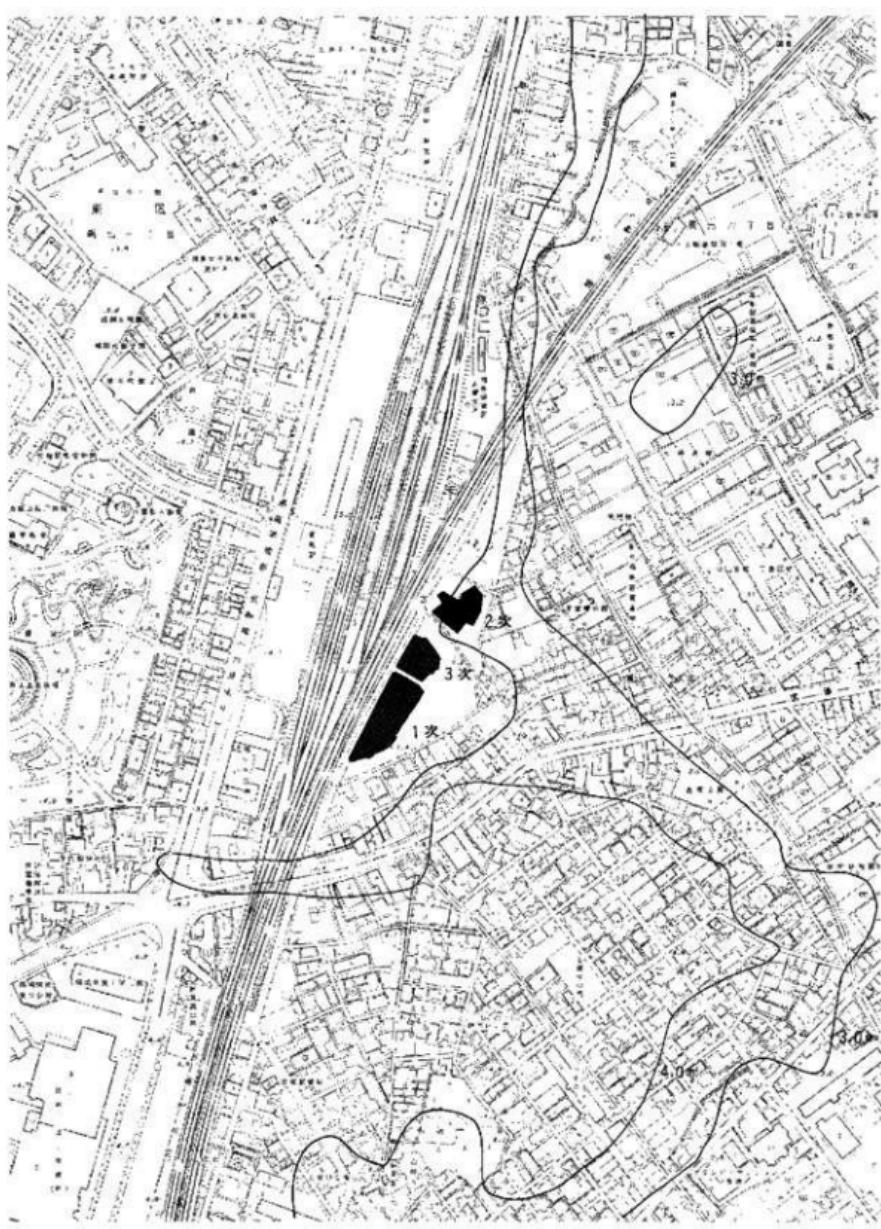
調査・整理補助 古川千賀子

調査参加者 石橋テル子 池田由美 岩隈史郎
金澤春男 金子國雄 鹿島喜代子
熊本文仲 熊本義徳 近藤澄江
篠崎伝三郎 高島ハル子 齐田慧
高田勘四郎 高波信夫 柳瀬伸
寺園恵美子 中川敏男 村田敬子
森山恭助 森山タツエ 脇田栄

吉塚本町遺跡群は御笠川の東岸、鹿児島本線吉塚駅付近にあたる。今回の調査区は平成2年度に実施した第1次調査区の北側に位置している。調査地は区画整理事業に伴い、駅前広場と道路建設が予定され、土木局街路課の申し出により試掘調査を行なった。その結果、古墳時代後期の須恵器を検出したことから、1次調査区の延長上に當まれた集落の存在が想された。標高約4.0mで地表下60~100cmで造構面の砂丘を検出した。検出遺構は古墳時代前期の土壙が1基、そのほか近現代のものとして、山田鉄(現在のJR九州)の操車場の基礎が明らかになった。調査地内は現状地形と同様、東側に向って緩く傾斜しており、1次調査で確認された律令時代の集落跡は確認できなかった。

出土遺物は、近現代の整地層などからコンテナ30箱が出土した。遺物は、縄文時代晩期の深鉢、弥生時代中期~後期にかけての壺・甕型土器、古墳時代から奈良時代にかけての須恵器・土師器などがあるが何れも小片である。また中世の陶磁片や近現代に至る土人形や茶碗をはじめとする雑器類が多くを占める。

今回の調査区は、砂丘遺跡が立地する風成砂層は南西隅に認められるのみで、主に海成層の発達がみられる。地形的にも東側へ傾斜しており、集落を営むのに安心感を得るほどの標高ではなく、砂丘の後背部と考えられる。このよう立地のため、律令期の遺構は、1・2次調査区の間で実施された3次調査(県教委の調査)区内で絶えてしまうようである。



吉原本町遺跡の各調査区と周辺地形(縮尺1/5,000)



点

描

吉

Ⓐ 福岡県庁(東から)

Ⓑ 発掘前の調査区はガードレールの部品が置かれていた。

Ⓒ この延長に道路が予定されている。

Ⓓ 雑草の刈取り作業

Ⓔ バックフォーによる表土の除去

Ⓕ 1次調査区(奥)と3次調査区(手前)



塚

本

町

- ⑩1.5m振り下げる箱
砂層になる
⑪煉瓦造りの操車場の
基礎

①造構検出風景

②発掘作業風景

③操車場基礎と搅乱

④発掘作業風景



吉塚本町遺跡 の立地について

●下山正一氏に聞く●

Q 今日は、九大理学部の下山さんに吉塚遺跡の地質についての話をうかがいたいと思います。要点は第一に砂丘形成の時期がいつ頃か、第二に海成砂と風成砂がからみあってくる、砂丘形成の過程について。最後に後背湿地を含めた周辺地形のあり方。以上について話をうかがいたいと思います。

下山 最初に砂丘完成期の状況を説明します。風上の海浜から風で飛ばされた砂によって浜堤の背後に砂丘が作られます。砂丘砂の場合には、砂の粒子が細粒で、粒子が揃ったものになります。これらは風で飛んだ砂の成分です。しかし、この現場の砂層には砂丘部分がなく、すべての砂層は波うちぎわで形成されたものようです。まず、堆積物の構造から、砂層の中に明瞭な水流方向がみとめられ、それが一方方向なので、河川の影響と考えられます。しかし、砂の粒度が揃っているため、波動による砂の粒子の淘汰のなされた可能性があり、本来この砂は海浜砂

と考えられます。両者を総合しますと、この砂は、河口付近の堆積物のようです。河口では浜堤が川の河口部分を砂で閉塞しようとしますが、河川はこれを突破しようとします。そのような河川と海のせめぎ合う場所が地山の砂層の堆積した当時の状況と考えられます。

Q するとここは砂丘のへりですか。

下山 へりですけど、河口の環境もあるので海側のへりですね。海岸砂丘や浜堤には、海側と陸側の2つのへりがあります。この遺跡の場合、地形的にいうと、浜堤の後背地なので、本来はこの浜堤背地に厚い砂丘砂層が存在するはずです。しかし、この現場では砂丘砂層部分が欠如しておりますので、本来あった砂丘砂層の部分が人为的に擾乱されて見えなくなっているのだと思います。

※箱崎砂層—aHZs

福岡市東区箱崎付近を模式地とする。本層は主に博多湾の南岸に分布しており、模式地から馬出、博多区呉服町、中洲、中央区天神、地行、百道、早良区西新をへて室見川河口に達する福岡市の市街地の主要部分を占めている。この他、東区の和白、香椎、舞松原、西区蛭の浜、生の松原、今宿に小分布がある。本層の主体は石英質あるいはマササギの砂層で粗粒砂の場合が多い。本層は海浜砂層を主体としているが、那珂川および御笠川河口部分の砂層およびシルト層と錯綜し、接する。住吉層の上部層とは一部指交関係にあるものと考えられる。層厚は変化に富むが、博多区での本層の厚さは最大7mである。

Q 地山の部分は砂丘ですか、それとも浜堤の陸側ですか？

下山 方向でいうと海側になります。たぶん急速に海岸線が前進していったのだと思



箱崎砂層北側の分布(縮尺1/50,000)

います。私が関心があるのは、むしろこの形成の時代です。最も古い土器の時期はいつですか？

Q この現場で出土したもののうち、一番古い土器は縄文晩期です。粗製鹽の破片が出土しています。弥生前期の土器はありませんが、中期の土器は数点あります。

下山 縄文晩期というとどれくらいの年代になるんですか。

Q 実年代でいうと、弥生の初めをどこにもってくるかですけど、BC 4～5世紀を考えると、今から、3000年ほど前です。

下山 それは、どの深さまで出土しますか？

Q それははっきりしないんです。しかし、少なくとも粗砂の中からは遺物は出土していません。

下山 ここで、バリアーについてお話しします。河川と浜堤との関係を下図のように示すと、河川は、はじめ海と塩性湿地を隔てるバリアーである浜堤列を直角に突破しようとします。しかし、波や潮流による河口部への砂の堆積で、ついに邪魔されます。このように、河川の突破に対して、どうしても波が妨害しますので、自然河川はどちらかに迂回させられます。

Q この遺跡の背後には、板付遺跡がありますので、板付との位置関係でこの付近に海との間を隔てる浜堤のバリアーが、いつ頃できたかという点が当時の遺跡の立地を考える上で重要です。

下山 バリアーはかなり早い時期に形成はじめで、すぐに海岸線の移動が始まったようです。多分この付近はバリアーがつくられたのち、人間の住居などに利用されるようになったと考えていいです。

Q その中心はもっと西側にあるんですね。

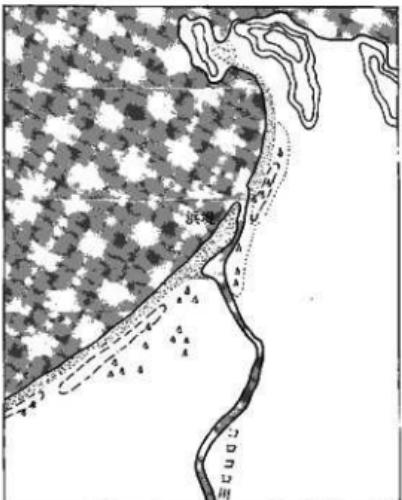
下山 ここだと砂丘の端の、水はけの悪い部分に近いですから、もし住居するなら、もう少し西側の方でしょう。

Q 3次調査区の方が遺物の量は多いです。

下山 向こうの地盤の方が高いんじゃないですか。

Q 少し高くなります。奈良時代の漁村の感じです。土錐とか、そういうのもたくさんでますし、製塩土器などもかなりでるんです。居住するには、河川は不安定ではないですか？

下山 その立地は当時の川の河口がどの位置



河川と浜堤模式図

にあったかにもよると思います。水利には河口の近くに住居をかまえた方がいいでしょうが、危険ととなり合わせであるにはちがいないでしょう。というのは、いつ川が氾濫して、河口の位置が大きく変更するかもしれないからで。

Q ところで、砂丘形成の時期は大体いつぐらいに考えたらいいですか。

下山 繩文晩期がでているということになると、砂丘本体の形成はそれ以前です。しかし、この下には繩文前期の海成層があるので、砂の下限は、それでおさえられます。はじめの砂の堆積は海中ですから、砂丘の発達し始めるのは繩文後期になってからではないでしょうか。

Q さいごにお話を総合すると、砂丘形成の時期は、縄文後期と考えられますね。また、砂丘形成の前段階として、海浜砂が堆積し、これを土台にして、風成砂がつくられていったとみてよいですね。板付遺跡と吉塚遺跡との位置関係を考えると、まず、博多湾岸に浜堤が形成されており、その陸側には葦原のような塩性湿地が広がり、板付付近に達して、ようやく安定した生活域となっていたということですね。

下山 そう思います。

END



撮影場(南より)

下山 正一 (しもやま しょういち)
九州大学理学部助手 (地球惑星科学教室)

1950年 山形県生まれ。主な論文『福岡平野における縄文海進の規模と第四紀層』九州大学理学部研究報告 地質学 16-1 1989年



地質調査中の下山氏

遺構と遺物

今回の調査で明らかになった遺構は、右の折込み図の配置に示すとおりである。主体をなすのは煉瓦造りの基礎であり、どうも機関車の修理・点検のための建物があったようだ。この吉塚操車場の時期は、3次調査区出土の牛乳瓶の年代などから明治の後半を上限とするようである。そして昭和40年前後まで存続した後、博多保線区の妙見宿舎建設によって大半は壊されたという。

この基礎の構造は、砂の上に割石を敷き、コンクリートの柱をのせ、その上に煉瓦を積み上げている。「砂丘の棲間」は艶さの替えに使われるが、地震

の少ない福岡では実に堅牢そのものだ。

調査区は東に向って緩く傾斜しているが、操車場時代の擾乱も手伝って、東部にかけて風成砂は殆ど削平されている。この中、SK-01は、不整形の土壌で、時期の決め手となる遺物も出土していないのだ



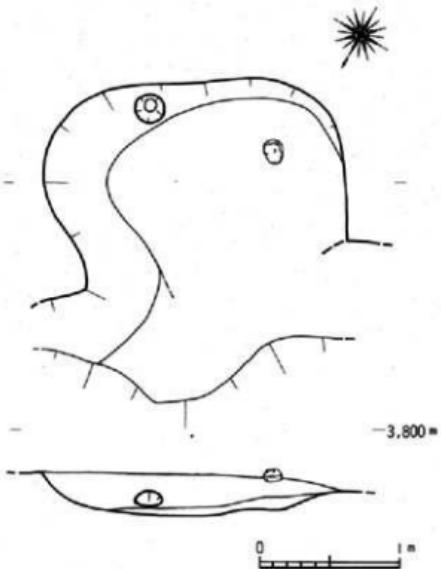
操車場の時期の基礎構造物



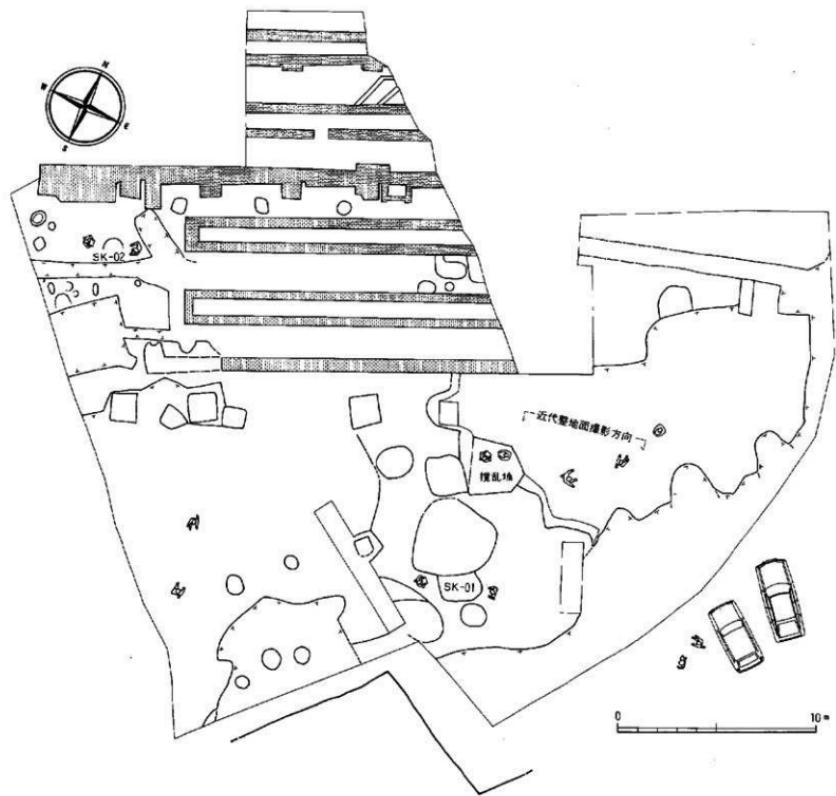
近代整地面の土層(北より)



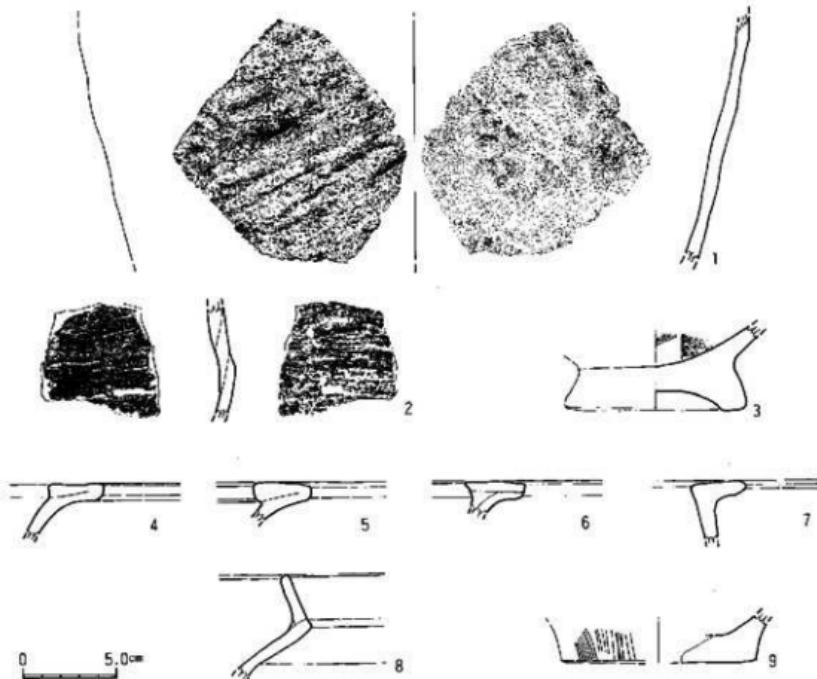
SK-01(南より)



SK-01実測図(縮尺1/40)



古墳本町道路 2次調査区 造構配置図(縮尺1/200)



吉塚本町遺跡 出土遺物実測図(1)(縮尺1/3)

が、東隅付近に頭蓋骨状のものが検出されたため、一応個別の図を作成した。

またSK-02は、今回の調査で唯一風成砂に掘られた遺構であるが、径70cm程の円形を呈すものの、時期の決め手となる遺物は、上師器の細片のみであったので、全体図に位置を示すにとどめる。

その他は、操車場建設に伴う近代の整地面だが、縄文晩期から近代の遺物までをランダムに混入している様子で、上層写真的撮影地点付近で近世以降の陶磁器が多く採用された。

出土遺物

縄文晩期の粗製甕の破片が3辺出土した。これは、西接する博多遺跡群で、これまで晩期から弥生前期にかけての土器が3列確認されている(博多17・20・28次)のに加えて砂丘利用開始の時期を補強するものといえよう。ちなみに3次調査でも縄文晩期の土器片や打製石斧が採集されている。

1は、粗製甕の胴部下位で、胴径は復元によるものである。外面は、内面に比べてやや粗雑なナデを施している。暗黄土色を呈し、胎土中には花崗岩系の砂粒を多く含む。焼成は良好である。

2は、粗製甕の屈折部の破片で、外面に横方向の

条痕、内面ナデを施している。粘土接合部は内傾で、暗黄土色を呈す。胎土中に花崗岩系の砂粒を多く含み、焼成は良好である。

3は、粗製甕の底部破片で、上げ底を呈している。胴部と底部の境目付近は、条痕、以下はナデが観察できる。底部内面は板状工具によるナデを施している。明黄土色を呈し、胎土中には、石英の粗粒と雲母粒を含む。底径は11.6cmをはかる。焼成は良好。

4～9は、弥生土器の破片である。前期に属するものではなく、中期と後期に属している。

4は、壺形土器の口縁部の破片である。赤褐色を呈し、胎土中には花崗岩系の砂粒を多く含んでいる。弥生中期中葉に比定される。

5は、壺形土器の口縁部の破片である。赤褐色を呈し、胎土中に石英長石粒を含む。弥生中期に比定される。

6は、壺形土器あるいは鉢形土器の口縁部の破片である。赤褐色を呈し、胎土中に花崗岩系の砂粒を含む。弥生中期後半に比定される。

7は、壺形土器の口縁部の破片である。黄褐色を呈し、胎土中に花崗岩系の砂粒を含む。弥生中期中葉に比定される。

8は、複合口縁壺の口縁部の破片である。黄褐色を呈し、胎土中に花崗岩系の砂礫及び柱状をなす黒色の結晶を含む。後期中頃に比定できる。小片なので確信はないが、他地域（東九州など）からの搬入の可能性あり。

9は、壺形土器の底部破片で、復元底径は10.3cmをはかる。赤褐色を呈し、胎土中に花崗岩系の砂礫を含む。弥生中期後半に比定できよう。

弥生土器は何れも小片で、表面には、チュー太郎の傷痕が観察できる。弥生時代の遺物は1次調査区の南隅の後期の土器と銅鑓、3次区調査区で、中期初頭頃の土器片が確認されている。

つぎに古墳時代以後の遺物について概要を記す。

古墳時代期の土壤が、調査区の西隅で確認されている。時期の決め手としたのは、土師器小型器台と思える細片であり、図化しえなかった。古墳時代の遺物としては、主に後期の須恵器がある。それに次ぐ資料として律令期の須恵器と土師器が続き、中世の貿易陶磁が少量ではあるが分布している。以後近世・近代になると遺物はコンテナ20箱以上に上る。その多くは整地面の覆土に混入したものである。西接する1・3次調査区では、土瓶やうなぎめしの容器、牛乳瓶など大正末から昭和初期にかけての駅弁関係資料が目立っているが、当調査区内では検出されていない。

10は、見受けの返りを有す低平な杯蓋で、復元径11.5cmをはかる。

11は、須恵器の高杯の脚部と思われる。脚部の復元径12.3cmをはかる。

12・13は、強く外反する腹口縁部の破片である。

14は、長頸壺の胴部破片で、算盤玉形を呈する屈曲部の一部である。

15は、人妻の胴部破片である。

16・17・19・20は、須恵器の杯底部の破片である。

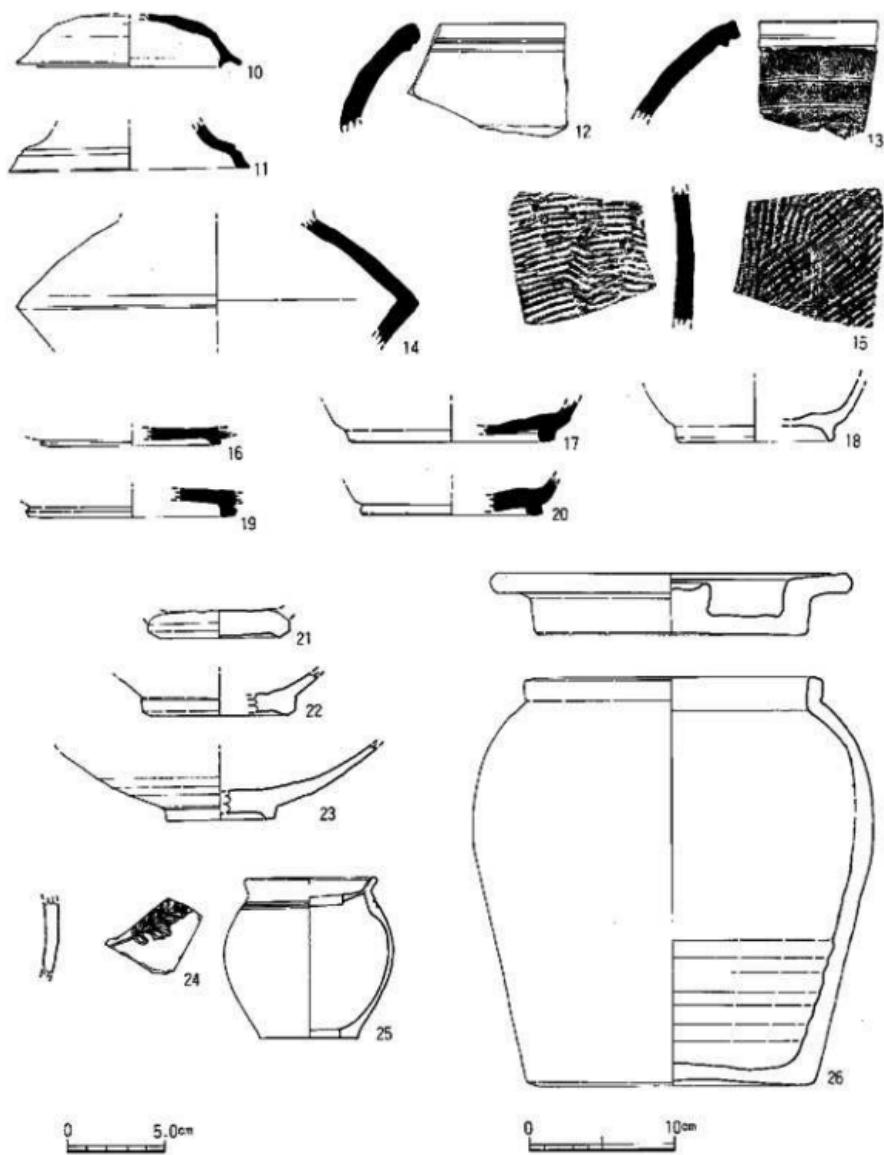
21・22は、白磁碗の底部で、口縁部は玉縁状を呈すると思われる。

23は、碗の底部で、外面は緑灰色、内面は青緑灰色を呈する。また内底部に重ね焼きの痕がある。近世陶磁と思われる。

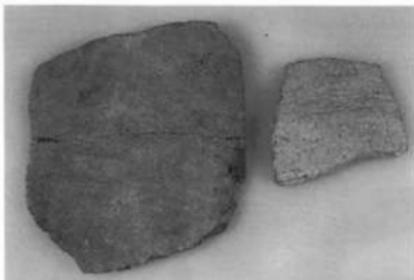
24は、中国陶器の壺の胴部と思われ、胎土中に砂粒を殆ど含んでいない。表面にスタンプによる施文があり、外面のみ褐釉が施されている。

25は、土師質の土器で、貯金箱として使われていたものである。底部に焼成後の穿孔があり、コインは取り出されていた。

26は、素焼きの蓋付容器で、内面には煤が付着している。消炭を入れる壺で、近世の省エネグッズである。



吉塚本町遺跡出土遺物実測図(2)(縮尺1/3・1/4)



粗製壺(縄文晚期)



粗製壺底部(縄文晚期)



スタンプ文のある褐釉陶器(中世)



上:大日本東濃泉村口商利八造とある碗
下:同裏側の図柄(口径6.5cm 高さ4.5cm)



玩具が描かれた小供用の茶碗(口径9.2cm 高さ4.4cm)



町名などの記された酒杯(上左 口径6.7cm)



貯金壺(高さ8.4cm)

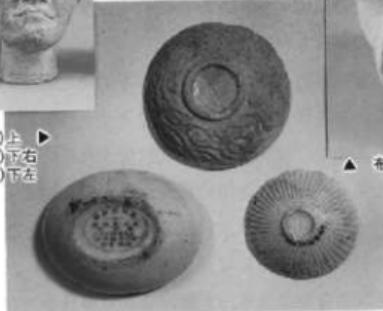
吉塚本町遺跡出土遺物①



◀ 西郷さん?の土人形(高さ7.9cm)左
男性首の土人形(高さ8.2cm)右



▶ 紅皿の容器(口径6.0cm)上
〃 (口径4.5cm)下右
臨印煉瓦屋の容器(長径6.5cm)下左



▲ 布袋さんの団柄の注口容器(高さ8.0cm)



◀ 二彩の土製品(上段)
鳥を形どった笛(左)
洋犬を抱く婦人(中央)
筆を持った男性(右)



◀ 焼きの人形(下段)
中央右の人物は明治から
大正にかけての軍人である。



近世の陶磁器(左の徳利 高さ24.0cm)

火消し壺の出土状況(上)と蓋をした状態(高さ28.0cm)

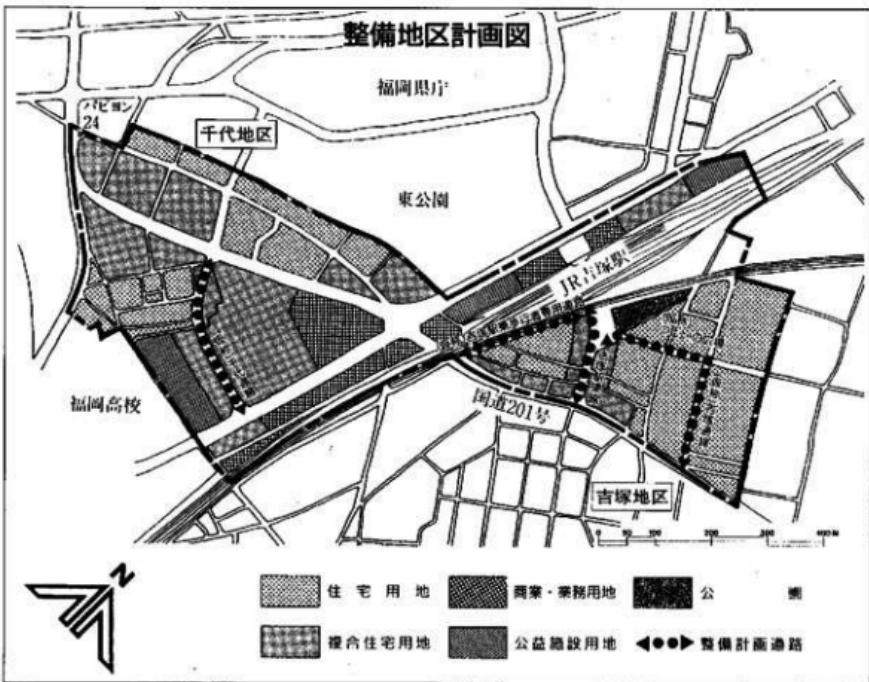
吉塚本町遺跡出土遺物②

ま　と　め

吉塚駅周辺の再開発事業は、パビヨン・シティオ21計画といわれている。空から見ると蝶が羽を広げた格好になるそうだ。かつての松原の面影は半世紀のなかで完全に様変わりをしてしまうわけだが、これは中核都市の宿命なのかもしれない。

今回の調査成果のひとつは、箱崎砂層の利用開始の時期を追認したことである。詳細は本文中の下山氏の談話を参照いただきたいが、文化財調査は関連諸科学との情報交換を通しながら前進するということだろう。そういった意味で、福岡市は環境的に恵まれている。旧国鉄の操車場について、30年前には使われていたにも拘らず、近郊住民の記憶からも殆ど消え去ってしまったような印象をうけた。大規模な建造物であっても、語り継がれるのはほんの僅か。まして文字が一般的でなかった頃、そしてスクラップアンドビルトの今日はどうだろうか。

調査にあたっては、西側で3次調査を担当された福岡県教育委員会文化課の井上裕弘氏、池辺元明氏の協力を得、円滑な作業を行なうことができた。また磯 望（西南学院大学）、下山正一（九州大学）の両先生からは、地質学の面でさまざまなアドバイスをいただいた。その成果は十分生かしきれていないと思うが、各位の叱正、御教示をお願いする次第である。



パビヨン・シティオ21計画図(福岡市作成)

Summary

Yoshizuka Honmachi Ruins are located in the eastside of the Mikasa river. This province belongs to Hakata ward of Fukuoka city. We designate one of the areas for rescue archaeology during the 1991 campaign "the 2nd. point of them".

At the 1st. survey, we found remains from late Yayoi Period and Kofun Period to Nara Period. So we expected there would be remains of nearly same Period.

As a result of this excavation, we recognized basis of buildings. The basis are thought to be a part of a marshalling yard, that is dated to former National Rail Road. And most of the ruins were destroyed by the basis but we could gather pottery aged from the end of Jomon Period, middle Yayoi Period late Kofun period and Nara-Heian Period to modern ages. Especially discovery of Jomon pottery is significant because they show when ancestors began to live there.

In addition to this report, we introduce geological interview by Dr. Shimoyama. At the end of this study we greatly appreciate advice and aid by many people.

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第320集

吉塚本町遺跡 2次調査 1993年3月31日発行

編集発行：福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号 埋蔵文化財課

〒810 ☎092-711-4667

印 刷：大野印刷株式会社

福岡市博多区桜山2丁目2番65号

The general report on the 2nd.
survey of Yoshizuka Honmachi Ruins



軍人の人形頭部と鳥形の笛(縮尺1/2)

1993 Mar.

by

Fukuoka City Board of Education.